

2017年春季研究発表会（創立60周年記念大会）ルポ

—ルポという名の極私的記録—



渡辺 隆裕（首都大学東京）

1. 準備委員会から実行委員会まで

「60周年の研究発表会だけど、沖縄でやったらどうだろう」と山下英明先生が言い出したのは、いつだっただろう。山下先生は副会長だったので理事会の後に聞いたのかもしれないし、大学で二つ隣の部屋にいるので昼飯か何かのときに聞いたのかもしれない。研究発表会は、今まで47都道府県のさまざまな場所で開かれているが、沖縄で開催されたことはない。「ほかの都道府県でも開催されていない場所があるじゃないか」と誰か言ったのだが、誰も調べたりはしなかった。私は「島根県と佐賀県で開催されたことはないのではないか」とひそかに思ったが、やはり調べはしなかったし、言い出しもしなかった。とにかく沖縄県で開催されていないことは事実だったし、60周年にふさわしいと思えたからだ。

やがて60周年記念事業の準備委員会が立ち上がると、沖縄開催は現実の話となり、大会実行委員会が組織されることになった。通常、実行委員は開催する地域の支部会員を中心に構成されるのだが、沖縄の会員は少数である。さらに60周年記念事業の一環でもあったため、実行委員は理事を中心に構成されることになった。ただ、自分はちょうど会計理事の任期が終わるところだったので、実行委員からは抜けられるかなど、考えていた。

思い返すと自分がOR学会に入ったのは1987年（入会日は11月13日）。60周年だとすると学会設立のちょうど半分の30年を学会員として過ごしたわけだ。「ぴったり半分」なんてのは、野々○真がパーフェクト賞を取るくらい稀なことだと思い、実行委員をやってみない気もした。一方で、ゲーム理論を専門として理系から文系の学部に移って久しい。OR学会は理系色も強いし、ミクロ経済学やゲーム理論を教えている自分がOR学会に30年もいる意味はあったのかな、なんてことも考えたりして、やはりこれで抜けようか

なとも思った。

実行委員長は、副会長でもあるし沖縄開催案を提案した山下先生が適任だろうとみんな考えていたのだが、誰も言い出せなかった。彼は大学でも非常に多忙であるし、これ以上の仕事は申し訳ないと思ったからだ。しかしよい案はなく、野々部理事から「『実際の作業は基本的にすべて、私を含めほかのメンバーで処理し、山下先生にお願いする作業は極力なくす前提で』山下先生に依頼できないか」というメールが私にきた。私は依頼のため二つ隣の部屋をノックすることになった。

こうして山下先生が実行委員長になり実行委員会が発足した。私はその責任から「山下先生の仕事は私がやります！」と宣言して実行委員に残った。山下先生が私に仕事を回したことはなく、この宣言は無意味だったのだが。

実行委員は新旧の理事から構成されることになったが、現地の実行委員がどうしても一人はほしかったので、琉球大学の鹿内健志先生にお願いすることになった。会場に関するさまざまなセッティングや、現地でのアルバイトの手配を一人でやるため大変な負担になることが予想され、引き受けて下さるか私たちは心配したが、鹿内先生は快く引き受けてくださった。その後、鹿内先生が多くの仕事を手際よくこなしてくださった。ちなみに鹿内先生は「しかうち先生」ではなく「しかない先生」と読む。「しかない」と読む人は東北の人に多いはずなので、「鹿内先生は東北の人ですか」と（発表会の日に）聞いてみたら、自分は違うが、お父様がそうだと教えてくれた。

いざ開催に向けて準備が始まると、私以外の実行委員は目覚ましい活躍を見せた。ネモさん（根本理事。歳が近く長い付き合いの友人なので、ネモさんとしておく）と野々部理事が中心となり委員会を開き、理事会や研究普及委員会向けの資料を作り、委員長と一緒に物事をテキパキ決めていく。利便性やアクセスを考慮し、会場は沖縄県市町村自治会館というところに

なった。藤本理事がホームページを作り、そこに斉藤理事が発表申込みのサイトを作った。本当にあつと言う間だった。プログラムとアブストラクト集の作成は、さすがに大変だろうと思っていたのだが、塩浦理事がこれもあつという間に作ってしまい、さらに発表者からくる多くのメールに全部対応していた（これが大変だった）。特別講演は(株)ANA Cargoの外山俊明社長とはこだて未来大学の松原仁先生に決まり、こちらは猿ちゃん（猿渡理事。同い年で、やはり知り合って長い友人なので、ここでは猿ちゃんとしておく）が中心となりテキパキ対応し、演題やスケジュールの細かい詰めが進んでいった。

結局、とどのつまり、最終的に、自分はまったく何もしないまま準備は整ってしまったのである。実行委員として、山下先生への宣言として、これはどうなんだろうと思っていたら「企業交流会と学会のルポを機関誌に書く人がいない」と言うことなので、せめてこれはやってみようというルポを引き受けた。機関誌の編集長でもある猿ちゃんが「いつもと違うルポにしたいね」と言ったので、いろいろ考え「Twitterとかアンケートとか活用して、それを引用してはどうか、Twitterは大会を盛り上げる意味でも有効だし」と提案した。今から考えてみると、忙しい大会準備の中で、いらない仕事を増やしてしまったような気がするのだが、実行委員のみんなは「やってみるといい」と快く賛成してくれた。これは広報に関する事なので、広報理事の藤本理事に一言相談してからやるべきだったと思うが、藤本さんは特に嫌な顔もせず、大会時は一番積極的にTwitterで呟いてくれた。藤本さん、ありがとうございました。

2. 大会が始まるまで

いよいよ大会も近づいてきたので、予告どおり会員へ大会の抱負をアンケートしてみた。その多くは私の呼びかけに応じてくれた知人、いわゆる「サクラ」だったが（回答24件）、それでもデータというものは面白い。沖縄に来る予定日を尋ねてみると（図1）、14日が一番多く59%、次いで学会当日15日が29%である（研究発表会は15日午後からの3日間）。なお13日という人がいるが、前日の14日には研究会が併設されていたので、これに来たと考えられる。また滞在日数だと、3泊4日が38%で一番多く、4泊5日が33%である。みんな沖縄を楽しんでいてくれたことがわかる。なお滞在日数や沖縄に来た日に「その

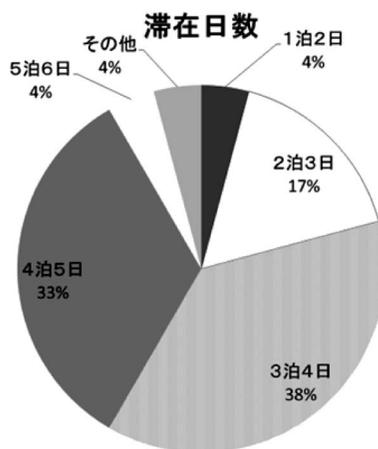


図1 沖縄の滞在日数

他」が1名いるが、これは沖縄在住の方である。

「何でもいいからつぶやいてください」との問いかけには「沖縄だからといって花粉症の薬を飲むのをさぼると、帰ったときが辛いので飲み忘れないようにしたい（しましょ）」、「沖縄、楽しそう！ スギ花粉とんでないし!」、「本土より暖かいんだろうな、杉はないだろうから花粉症にいいかな」、という花粉症に関する意見が最も多かった。次いで「12年ぶりの沖縄なので楽しみです」、「20数年ぶりの沖縄、その変化を自分の目で確認したい」という「久しぶりの沖縄」という意見も目立つ。

私は花粉症ではないのでわからないが、花粉症の人には春の大会の開催場所に花粉が飛んでいるかどうかは、とても大切なことらしい。実際、同僚のMG先生も沖縄開催が決まったとき「花粉が飛んでない場所で嬉しい!」が第一声であった。私もそれを聞いて、一緒に喜び、沖縄にしてよかったと思った。しかしここで、MG先生は大会直前にインフルエンザを発症し、大会をキャンセルし、共著者の室田先生が発表を代わったという悲しい結末を、つけ加えなければならない。

大会前日の14日（火）。いよいよ沖縄に入ることになった。夕方の羽田発の便を予約していたが、12時からの学科の会議に出なければならなくなり、13時にバタバタと大学を出た。東京は雨が降っており、視界もよくない。機内では早々に寝入ってしまい、気がつくとき着陸態勢に入っていた。外は、もうすっかり暮れていた。それでも沖縄の海を見ようとして窓をのぞくと、青い海が果てしなく広がるというよりは、意外にも倉庫群というかコンビナートというか、そういう

人工的な明かりで満ちていた。空港の近くだからしょうがないか。

ホテルは学会会場の隣だったので、空港からゆいレールに乗った。ゆいレールの改札は、切符に印刷されているQRコードを読取機にかざすという変わったものであった。しかも、このQRコードは半分が真っ黒に塗られている。何でこうなっているのだろうか？自分としては読取り時間を減らしラッシュに備えるためだろうと予想した。この予想に「自分さすがだな」と自己満足したのだが、今回、ルポを書くにあたって、塗りつぶされている理由を検索してみると、理由は全然違っていた（興味のある人は調べてみてください。しかもこのQR乗車券は、ネットで見ると、とても評判が悪いようでした）。QRコードの読み取り時間は、塗りつぶしても減らないし、そもそも全く関係ありませんでした。がーん。

最寄り駅の旭橋に着き、降車してそのままコンコースを歩くと、ホテルにはすぐ着いた。時刻は20時。国際通りという随一の繁華街が近いようだったが、お腹がかなり空いていて、国際通りまでは我慢できなさそうだった。近くで何か食べようと思い、部屋の窓から外を見ると「那覇ステーキ」という看板が見えた。

実は、前日に沖縄に入ったUさんがTwitterで「夕食にステーキを食し、たいそう美味かった」と呟いていた。沖縄には、多くの有名ステーキハウスがあり、ステーキは名物料理と言えそうである。「縮めのラーメン」の代わりに「縮めのステーキ」を食うとか食わないとか、そういう話もあるらしい。そんなことを知っていたので、「これは天の思し召しだ。那覇ステーキしかない！」と思い、さっそくホテルを出て、そちらの方向へ歩いていった。

那覇ステーキは直線距離では200 mくらいに思えたが、ホテルとの間が工事中のバスターミナルの区画で隔てられており、その工事区画をぐるりと回って行かなければならず、少し距離があった。途中で、焼き鳥屋や居酒屋など、大変美味そうなお店が何軒もあり誘惑に駆られたが、「肉、肉、肉だ」と自分に言い聞かせ、強い意志をもって那覇ステーキへぐんぐん向かっていった。那覇ステーキまで、あと30 mくらいだろうか、その時である。「肉」とドーンと大きく書いた看板が目の前に現れた(図2)。「肉とワインとハイボールブッチャマン」とある。2~3秒迷ったが、ハイボールでステーキを食して、その後、赤ワインに切り替えて満足している自分が脳裏に浮かび、その店に入った。

さらば那覇ステーキ。

店の中は意外にも20代くらいの若者が4人で切り盛りしており、バーとレストランの中間のような作りであった。大丈夫だろうか、と思ったが、お客さんが何人かおり、楽しそうに飲食していたので、安心した。とりあえずハイボールを頼み、喉を潤しながらメニューを睨み「県産和牛炙り」というものを注文した。ぶ厚いステーキとは違っていたが、いろいろな塩とわさびで食べるお肉は美味しく満足した。大会を盛り上げる意味もあり、肉の写真を撮りTwitterで流した。するとTwitterからは、藤本さんがステーキを食べているという情報が流れ、やがてそれに呼応して猿ちゃんもステーキを食べていると流れてきた。少なくとも3人の実行委員が別々の場所でステーキを食べていたことになる。



図2 肉とワインとハイボール

3. 大会初日：特別講演と表彰式

15日(水)、いよいよ大会初日である。例年だと研究発表会は2日間で、その前日はシンポジウムが行われる。しかし、今回はシンポジウムは行わず、研究発表会を3日間開催とし、初日は午後から特別講演と近藤賞の表彰式とした。午前9時に会場に集合すると実行委員はすでにほとんど集まっていた。鹿内先生が琉球大学のアルバイトの学生さんたちと一緒に来ていたので挨拶をした。最初に沖縄コンベンションビューロからもらったコンファレンスバックに、観光パンフレットとアブストラクト集などを袋詰めする作業があり、アルバイトの学生さんが鹿内先生のもとでその作業を行うことになった。袋詰めは400部必要で、これはちょっとやそつとで終わらない量に思えた。とりあえずほかの準備で何かを手伝おうと思い、会場をうろついた。

受付や会場では、事務局や実行委員がそれぞれの持ち場でそれぞれに動いており、看板の設置、受付の準備、特別講演の講師を迎える準備などが着々と整っていた。自分は、やっぱりやることなく、無駄な人であった。今回はこうなることを予想し、一つのアイディアを持ってきていた。「カメラマン」である。

パッパカパーン。記録写真を撮るといふ名目で大会のさまざまな風景を撮ることにしたのである。やっぱり無駄な仕事を増やしている気もしないわけではなかったが、受付の準備や会場のセッティングで、望遠レンズを付けてカメラをカシャカシャやっていると、なんか大会に貢献できている気になってきた。実際「お疲れさまです」とか「カメラマン大変ですね」とか、いろんな人に声をかけられ、実行委員としての存在感は出ていたようだ。調子が出てきたので、袋詰めの様子を写真に取めようと、琉球大の学生たちの控室に行ったら袋詰めはもう終わっていた。なんとという手際のよさだろうか。

12時30分になり、いよいよ受付が開く。開場前から、少しフライング気味に何人かが受付を訪れ、開場すると人が流れ込み、受付に列ができていった。初日の特別講演に人が集まるかどうか心配したが、全く問題はなかった。

いよいよ大会が始まる。最初は大山会長の挨拶。黎明期のOR学会の話や、それを未来に受け継いでいく必要性について。60周年にふさわしい挨拶だ。

次に特別講演。最初は(株)ANA Cargo社長の外山俊明氏「ANA Cargoの航空貨物戦略について」。最初の「皆様、沖縄までは青い翼で飛んできていただいたかと思えます」との言葉で会場が一気に和む(ツイートもされました)。まず貨物便の航空機(貨物便ってこんなに種類があるんだ)。貨物便はどこから来てどこに行くのか(アジアからの輸入、輸出が多い)、どんなものを搭載しているか(日本からは電子部品や化粧品など)など、あまりなじみのない貨物便の「基礎知識」から始まる説明とスライドで、プレゼンに一気に引き込まれる。本題は那覇空港の物流戦略についてである。アジアと日本の物流に対して、那覇空港はその立地から重要な拠点となる。日本各地からの野菜や魚介類が夜に那覇空港に持ち込まれ、24時間の通関体制を利用して深夜に通関を済まし、早朝に出発する便に乗って次の日には新鮮な野菜がアジア各国に届くという。よくTVなど見ていると、上海や香港やシンガポールの高級レストランなどで、日本のお刺身が出てくるが、これがその仕組みだったのか。那覇空港の貨物取扱量は、成田、関空、羽田について4位であるという。沖縄についてとき、窓から見えたのは海ではなく倉庫群だったことを思い出した。

次の特別講演は、はこだて未来大学の松原仁先生「人工知能はわれわれの生活をどう変えるか」。まず人

工知能の歴史について:「OR学会より人工知能のほうが一つ年上」。1956年に行われたダートマス会議を始まりと考えるならば、人工知能は61周年。日本OR学会より一つ上だといえる。また、今、人工知能は3回目のブーム。1回目のブームはいわゆる「機械翻訳」である。このとき「精神は尊い」を「ウォッカはおいしい」に訳してしまった(spiritをお酒のスピリットと間違えた)。第二のブームは80年代で、経済のバブルと同じころ。このとき国が行った「第5世代コンピュータプロジェクト」は、戦艦大和と並ぶ日本のワーストプロジェクトになっているとか、なっていないとか。そして2回ブームの後に冬の時代がきて、現在の第三ブームということだ。

その後の話は、これから人工知能がどのように生活に組み入れられていくか、について。しかしそれ以上に、一般の人々が人工知能に対して「過剰な期待」や「過剰な不安」を抱えていることが多い、という話が多かったように思える。

「今日1番印象に残ったのが、F1の車とボルトが競争して負けても、誰もボルトを責めず当たり前、と捉えるのに、人工知能にプロ棋士が負けると、なぜみんな怒りを覚える…という話」というツイートがあった。一般の人は、スポーツや芸術に力を入れる人は好感をもって見るが、人工知能という機械やプログラムを作る人間にはあまり共感してくれない。自分の仕事を奪っていくような冷徹な敵のように見られることもある。このモヤモヤした感じはORで仕事をする私たちにも共通することかもしれない。「人工知能はなぜ嫉妬されるのか。人は尊厳が傷つけられた気がするのか? 100m走るのに車に負けても悔しがらないのに、体力で負けるのには慣れているが(動物にも)、知



図3 田口先生の近藤賞記念講演

性で負けた経験があまりなかったから」と松原先生がいう。なるほど、と共感した。

次は近藤賞の授賞式と記念講演。今回は中央大学の田口東先生が授賞。記念講演は「電車・駅の旅客流動を高精度に推定する数理計画モデルの作成プロセス」というタイトルで、2020年の東京オリンピックでの首都圏の交通ネットワークや新宿駅での混雑に焦点を当てたものであった。田口先生の旅客流動のシミュレーションは、いつも凄と思うのだが、特にヴィジュアル面での発展が素晴らしい(図3)。首都圏を走る電車に乗って移動する旅客が、その混雑度で色を変えて表現される。「あ、あれは東横線だな、あれは横須賀線かな?」と見ていてとても楽しい。あつという間に終わってしまったのだが、今度、田口先生にお願いして1時間くらいじっくり見てみたいものである。シミュレーションのバックが黒なので、チカチカと赤や黄色の旅客が流動するさまは、星空を走る銀河鉄道を想像してしまうのだ(銀河鉄道というのは、私の場合、宮沢賢治ではなく999である)。近藤賞は、過去の業績に対して贈られるものだけど、田口先生は現在も第一線で活躍されており、そして2020年の東京オリンピック・パラリンピックという未来の問題に対して解決を提示されているところが凄い。

次は表彰式。今回は、業績賞に水野眞治先生(東京工業大学)と大澤義明先生(筑波大学)。普及賞に山田茂先生(鳥取大学)。実施賞として九州大学マス・フォア・インダストリ研究所富士通ソーシャル数理共同研究部門(部門長:吉良知文先生)。新フェローに、大橋守先生(徳島大学)、桑野裕昭先生(金沢学院大学)、樫尾博氏(東京ガス(株))。そして名誉会員に前会長の大宮英明氏(三菱重工業(株)取締役会長)。理事時代に大変お世話になった大宮元会長のことや、一緒に庶務理事をやった樫尾さん、大澤先生や吉良さんのことなども書きたいけど、極私的に今回は水野先生の話に焦点を絞ってみたい。

水野先生は、私が学生のときの研究室の助手である。修士と4年の計3年間にお世話になった。水野先生は数理計画が専門であるが、修論のテーマにゲーム理論を選んだ私は、何か変なことをすぐ思いついては、水野先生に持って行っていた。研究とは何か、助手や研究者の生活とは、当時はどんなものかわかっておらず、助手の先生は自分が勝手に選んだテーマでも研究を見てくれるのだろうと思っていた。水野先生はテンポカンブンな私の話に、よくまあ付き合ってくれた



図4 水野眞治先生

と思う。何とか修士論文として結果が出て、よかったなと思っていた矢先に、水野先生が「その結果をまとめて、投稿論文にせよ」という。「いや、これはまだ考えなきゃいけないこともあるし」、「この結果では弱いと思うので、もう少しやってから」と言い訳をする私に、「そう思っていたら、いつまでも書くことができない、いつ書くんか?」とか、「論文を書きながら、結果を整理していかなければいけない」とか、「とにかく論文を執筆する姿勢を身につけないといけない、考えて結果が出ただけで満足して、それを論文にしない人がたくさんいる、そうやってはいけない」とか、なんか、そんな類いのことを(不正確でごめんなさい)いっぱい言ったのである。あと「雑誌に載るかどうかを判断するのは、自分ではなくてレフェリーだ」というようなことも言った(不正確でごめんなさい)。だから「自分で駄目だと判断せずにとにかく出せ」と。これらの言葉は、私のその後の研究者としての人生に大いにプラスになった。こうして私の初めての投稿論文は水野先生と後輩の宮本君(現野村総合研究所)との共著である。この論文は、半年前に同じ結果が出て、すでにアメリカでDiscussion Paperになっていたため(インターネットもない時代で調べられなかった)リジェクトされてしまった。しかし、何とか現在の職を得られたのは、水野先生の教えを守って何とか論文を書いたためだと思う。水野先生のスピーチを聞きながら、そんなことを思い出していた(図4)。

その夜は、早稲田大学の船木先生と飲みに行くことになる。いつも海外のゲーム理論の学会で一緒になることが多く、そのたびに食事に連れて行ってもらっているが、国内の学会で一緒になるのは稀であった。「連れて行ってもらおう」というのは、船木先生はどこ

の国のどこの都市に行ってもお店をよく調べていて、ついで行くと、どこでも美味しいものにありつけるのである。リスボンでも、マーストリヒトでも、アムステルダムでも、パリでも、船木先生行くところに間違いはなし、であった。

今回、船木先生が選んだのは、公証市場の近くの魚屋の店内が居酒屋になっている店だった。客は、軒先に氷で冷やしている缶ビールなどを、自分で持ってきて飲む。注文すると店主が生魚を持ってきてくれるので、それを自分が七輪で焼く。そういうスタイルの店だった。魚は美味しく、カンパチのカマを焼いて食べたのが、特に美味しかった。その野性味あふれるスタイルは、沖縄のイメージに合っているようには思えた。料理自体が沖縄らしいかどうかはよくわからなかったけれども。

4. 大会2日目：一般発表

2日目になって一般発表の日になった。一般発表の内容は、今回のルポでは書かない。ここでは大会に参加していた3人の知人について書く。

S先生：S先生の名前を参加者名簿に見つけて驚く。彼はOR学会員ではないはずだ。これこそ沖縄効果なのだろう。彼は（私の職場の）首都大の前身となる都立大経済学部出身で、さらに私が住んでいる街の出身で、さらにさらに彼の幼稚園はうちの3軒隣にある「コマクサ幼稚園」である。先日、家の裏庭の草むしりをしていたら、隣の奥さんが「Sさん（S先生）を知っているか」と話しかけてきた。何でS先生を知っているのか聞いたところ、彼は都立大のオーケストラだったそうで、隣の奥さんと旦那さんはその後輩なのだそうだ。隣の夫婦が、うちの大学出身で、そしてオケで知り合い、そしてそしてS先生の後輩とは！ 先日、奥さんがオケの同窓会でS先生と会い話をしていたら、「そのあたりに渡辺さんという人が住んでいませんか？」「あら、私の家の隣よー」とそんな感じになって、すいぶん盛り上がったという。奥さんは、「この人、平日の午前9時に草むしりしているなんて、まともな勤め人ではないな、きっと妻に食わせてもらっているのだろう」と思っていたのに違いないので、大学のセンセイとわかってよかったともいえる。S先生ありがとう。会えるだろうか、会ったらこの話をしようかと楽しみにしていたが、彼と会場で会うことはなかった。学会員ではないので、S先生は、この原稿を見ることもないだろう。

M先生：朝、発表会が始まる直前、廊下でMさん（M先生）に会った。昔は毎週会って共同研究をしていたが、ここ10年は年賀状のやり取りだけで、とても懐かしかった。これも沖縄効果だろうか。思い出すのはMさんとI先生と私の妻とイタリア料理を食べに行ったことである。当時、MさんとI先生と勉強会をやって、その後は男3人で飲んでいたのだが、「男ばかりで野暮ったく飲んでばかりはよくないので、たまにはイタリア料理をオシャレに食べに行こう！」と私が言い出し、Mさんがお薦めの青山のお店を予約したのである。「渡辺さん、苦手な食べ物ありますか？」とMさんが聞く。私はほとんどのものを美味しくいただくのだが（1）玉ねぎをまるごと、もしくは大きめに切って、煮たり焼いたりしたもの（ポトフとかに入っているようなやつです。生や細かく切っているものは大丈夫）」と（2）すけとう鱈の白子（真鱈の白子は好物です）の二つだけが食べられない。そんな特殊なものが出ることは非常に小さな確率なので「何でも大丈夫です」と答えてしまった。

当日、お店で出てきたのは「丸ごとの玉ねぎの中をくり抜いて、中にスープを入れてオーブンで焼いた料理」であった。その店の名物だという。

そんな懐かしいMさんであったが、会ったのが朝の発表が始まる直前で、行きたい会場も別だったため「あとで話しましょう」「あとで会いましょう」と言葉を交わして別れた。そして、それっきり会うことはなかった。

K君：写真を撮るために、とあるセッションに入ると、とても目立った男がいた。赤いセーターで、大きく身振り手振りをクネクネとつけて、発表にコメントをしていた。頭を短く刈っていてちょっと怖そうだったが、それは間違いなくK君であった。K君は私が助手をしていたときの、斜め向かいの研究室の学生である。それほど話したことはなかったが、頭を金色に染めていたので、よく覚えていた。あの金色の頭は、10年以上経って、こんな風になったのか、と感慨深かった。会ったのは20年ぶりくらいだろうか。確か彼もOR学会ではなかったはずである。これも沖縄効果か。話しかけてみようかとも思ったが、ほかのセッションの写真を撮っているうちに、そのセッションは終わっていて、やはり会うことはなかった。

5. 懇親会

2日目の夜は、待ちに待った懇親会である。お楽しみは「エイサーの演舞」（図5）と「泡盛試飲ブース」

(図6)で、これはネモさんが沖縄観光コンベンションビューロに連絡し、取りつけてきたのであった。学会などの開催時には、観光協会などに連絡を取ることが大切なのかと勉強になった。私も写真を撮るくらいなら、このくらい気の利いたことをするべきであった。



図5 エイサーの演舞

本物のエイサーを見るのは初めてであり、ライブはテレビなどで見るよりも迫力がある。そして泡盛試飲ブースは、泡盛を1~2本くらい試飲するのだと思っていたら、30本以上の泡盛が、ずらりと並べられていて、自分に合った泡盛を選んでくれるという大層なサービスだった。企画したネモさんも、ここまでとは思わなかったようで、たいへん驚き、大層喜んでいた。



図6 ずらりと並ぶ泡盛

この泡盛試飲には、泡盛の女王がやってきて盛り上げてくれるという企画がついていた。泡盛の女王は1年に何名か選ばれるそうだが、今回はそのうち1名がやってきてスピーチを行った。さすがに女王だけあって、私よりずっとうまいかもしれない。泡盛試飲ブースには、さらに素敵な女性がいて、新垣結衣や満島ひか

りを産んだ沖縄の底力を見たと思ったら、それは「新」泡盛の女王だそうである。新年度からの泡盛の女王ということで、下克上などがあったわけではない(図7)。

実行委員の挨拶があり、山下実行委員長に続いて、鹿内先生の歓迎の挨拶があった。続いて乾杯の発声は、伏見前会長と腰塚前会長。前日の大宮前会長も含め、これだけ前会長が集合するのも珍しいと思う。沖縄効果か、OR学会では会長ごとの派閥がないので、それがよい、と皆が言う。ほかの学会はわからないが、住みやすさというか、心地よいというか、そのような一体感をOR学会には確かに感じることができる。乾杯の後には、それぞれの歓談。途中、中国のOR学会会長の来日挨拶などがあり、最後に次回開催の関西大学の木村先生の挨拶があって懇親会は締めとなった。



図7 新旧泡盛の女王と

6. 大会3日目：一般発表

3日目の一般発表。2日目と同様に発表内容については触れず、自分の専門分野であるゲーム理論と研究発表会におけるセッションについて書く。

20年ぐらい前は、ゲーム理論分野で発表する者は少なく、私の発表は意思決定や金融などのセッションに含められていた。同分野の研究者も少なく、昼食を取るときも数理計画や金融工学の人たちと一緒に食べた。しかし、このような時期に発表することで、自分と異なる分野の勉強もできたし、知人も増えたと思う。最近はゲーム理論のセッションは必ず三つか四つ組まれており、今回も3セッション組まれている。嬉しいことである。

昼食は、琉球大の鹿内先生と学生たちに交じって食べた。すると、そこに学生たちのOGとOBが現れる。「先生に会いに来たんよー」と卒業生。照れる鹿内先生。卒業して公務員となり、会場の隣の合同庁舎に勤

めているが、先生と後輩たちがいると聞きつけて、会いに来たそうだ。アルバイトの学生は総勢で20人、みんな農学部学生である。県内比率は50%くらいだという。卒業生も同級生も先生もみんな仲がよく「和気あいあい」という言葉がびったりである。

学生たちに、発表がわかるかどうか、どんな発表が面白いのか、と尋ねてみた。「わかる発表とわからない発表があるね」「購買行動の話とか、噂の伝播の様子とかの研究が面白かったです」「数式が多く専門が違っていると、全然わからないな。4分で飽きちゃうね」などの意見である。私のコメントは差し控えよう。

そうこうしているうちに、大会も終わりに近づき、片付けの準備に入る。例によって、実行委員のみんなは自分の動き方がわかっている、看板を片付ける者あり、受付を撤収する者ありだが、相変わらず自分はすることがない。もう写真も十分撮ったし、しょうがないので、撮った写真の整理と企業事例交流会のルポの整理を始めた。そうこうしているうちに、テキパキと後片付けも終わり、実行委員の打ち上げとなった。どうもすみません、打ち上げは盛り上げますよ～。

ということで、隣のビルのレストランで乾杯。「とりあえず大会は、成功かな」「実行委員長が参加者は400名を超えるだろうと言ったときは、それはさすがに無理かなと思ったけど、超えてよかったね」とネモさん。よかった、よかった。実行委員のみんな、とてもよい笑顔である。よい気分になり、いつまでも沖縄にいたかったが飛行機は20時発であった。後髪を引かれる思いで、沖縄を後にした。

7. おわりに

こうして60周年記念大会のルポを書いてみると、それは学会と自分との関わりを振り返ることに繋がっていた（無理やり繋げた感もある）。

ORという分野に最初に足を踏み入れた理由は、社会のさまざまな現象を数理モデルにして解決していくという、その面白さに惹かれたからだが、最近では自分の研究や、大学の雑務で頭がいっぱいになり、つついそんな初心は忘れてしまう。研究発表会でさまざまな発表を聞くことで、自分の中のその昔の気持ちが少しは戻ってくるというか、眠っている知的好奇心が呼び起こされるというか、うまく言えないけど、何かそんな気がした。

あと学会は、人との出会いの場だなと感じた。入ったばかりの頃は、まさか猿ちゃんやネモさんと30年経ってこのような形で仕事をするようになるとは思わ

なかった。沖縄効果とはいえ、MさんにもK君も会えた（というか見た）。若い諸君も学会でいろいろな人と出会い、長い長い付き合いをしてほしい。

アンケートで感想を聞いたので、その結果についても記しておきたい（回答16件）。沖縄から帰った日は、16日（2人）、17日（8人）、18日（4人）、19日（2人）で、みんな沖縄を楽しんで帰ったようだった。私も次の日に帰ればよかった。発表の中で一番興味深いものは？ という問いに、2-E-15を2人の人が挙げており、ほかに2-E-14、2-B-5、「水素ステーション最適配置についての2件の発表」「心理学に基づいたリスク尺度の提案の発表」「二日間を通してすべてF会場にいましたが、充実していたと思います」という回答があった。なお「室田先生のOR学会での10数年ぶりのご発表→20分後に再びご発表の流れ」という回答があり、MG先生のインフルエンザの衝撃が、ここにも現れていた。

大会は、参加者427人、懇親会210人、発表件数は220件くらい（滝沢事務局長調べ。数えて頂きました。すみません）であった。発表者数は1名を引けば良いはずだ。

8. 謝辞

最後に、こんな私的の文章に付き合ってくれた皆様と、掲載を許可してくれた編集長の猿ちゃんに感謝します。すべての文責はもちろん私にあります。見ておわかりのとおり、大会2日目と3日目のルポは、大会にあまり関係がない私事です。おバカです。ありがとうございました。またTwitterやアンケートに協力いただいた方々にも、この場を借りて感謝いたします。このTwitterとアンケート企画には、田中未来先生と後藤順哉先生に相談に乗っていただきました。ありがとうございました。

最後の最後に、ルポ執筆中に野々○真がパーフェクト賞を取ったことを報告しておきたい（2017年6月10日、第1436回）。野々○真がパーフェクト賞を取ったのは、放送開始1,400回までのうち10回しかない（番組ホームページより）。今年の1月14日（第1421回）にも取っているのだから、これで12回目だと思う。このことを調べていて気づいたのだが、「世界ふし○発見」も昨年で放送開始から30周年であり、私にとっては「日本OR学会に対する人工知能」のように一つ歳上の存在であることがわかった。ともに40周年を迎えていきたい、いや、もといOR学会の70周年に向かっていきたい。そのためには、徹子さんに元気でいてほしいと願って、ルポの終わりとした。